

## 唐宋田園詩詞札記(下)

—菜花・黃花・五辛盤・花信風—

植 木 久 行

(7)

ここで唐宋詩詞に用いられた「菜花」の語をとりあげ、その意味上の変遷を考えていきたい。唐詩の用例で最も著名なものは、中唐の劉禹錫作「再遊玄都觀絕句」詩のそれである(上海人民出版社刊『劉禹錫集』卷二十四に拠る)。

百畝中庭半是苔 桃花淨尽菜花開

種桃道士婦何処 前度劉郎今又来

この詩には、周知のごとく作詩事情を伝える有名な長い序文がある。

余貞元二十一年為屯田員外郎時、此觀未有花。是歲出牧連州、尋貶朗州司馬。居十年、召至京師、人人皆言有道士手植仙桃、滿觀如紅霞。遂有「前篇」、以志一時之事。旋又出牧、今十有四年、復為主客郎中。重遊玄都、蕩然無復一樹、唯免葵麥動搖于春風耳。因再題二十八字、以俟後遊。時大和二年三月。

序中の「前篇」とは、「玄都觀裏 桃千樹、尽く是れ劉郎去りて後に栽う」と歌う「元和十年自朗州承召至京、戲贈看花諸君子」の絶句を指し、また序文最後の大和二年三月とは、文宗の年号(八二八年)である。この二首の詩は、

早くも約六〇年後の晩唐の光啓二年（八八六）の自序を有する孟棻の詩物語集『本事詩』事感篇第二のなかに収められ、前引の序文も同書の記事に基づく。いま問題とする「桃花浄尽して菜花開く」の「菜花」の字に関しては、五代前蜀の韋毅編『才調集』巻五、北宋の『文苑英華』巻二二六、南宋の計有功『唐詩紀事』卷三九などにおいても全く文字の異同がない。<sup>注(1)</sup>

さてこの「菜花」は序文の終りに「大和二年三月」とあるごとく、晩春の長安城内にあった玄都観（都最大の道教の寺院で崇業坊にあった）の描写であるが、いわゆるアブラナ属の黄色い花を指しているわけではない。この点については、すでに清の王堯衢『古唐詩合解』巻上（一七三二年自序刊）に、

野菜花也。其自序云、「惟見免葵燕麦動搖於春風」。即菜花類也。

と明言するごとく、野菜（食用の野草）の花である。「菜」の字は、後漢の許慎『説文解字』巻一下に「艸くさの食らふ可き者」とあるごとく、本来採集された野生の植物を意味し、藤堂明保著『漢字語源辞典』にも、「採と同系のコトバで、つみとる野草を意味する。野の若菜をつむには、伸びた若芽だけを手で中途からたち切る。……のち栽培する食用野菜の意にも用いるようになった」と説明されている（学燈社刊）。つまり、この劉禹錫詩の「菜花」は、「菜」の原義を生かした、野草（野菜）の花を意味する用法といえよう。

ちなみに、序文中の「免（＝菟）葵」は、白い花を咲かせるウサギアオイ（日本では産しない）をい、<sup>注(2)</sup>古くは蔬菜の一種であった。また「燕麦」は雀麦・野麦とも呼ばれ、ツバメやスズメなどが好んで食べるための命名という。和名はもとカラスムギ・チャヒキなどといったが、スズメチャヒキの名称が正しいのだともいう。<sup>注(3)</sup>要するに、免葵にしる燕麦にしる、飢饉の際には非常の食用に供されるが、唐代では平素、野生の雑草の一種と目されていたらしい。劉禹錫の「桃花浄尽菜花開」の句は、一面に桃花の咲きはこっていた玄都観の庭園が今やすっかり荒廃して、雑草の生い

茂るにまかせた状況を表現したものである。そしてこの「菜花開く」の表現は、実は劉禹錫が愛用する「野草」のイメージの一種と考えてよい。

朱雀橋辺野草花 烏衣巷口夕陽斜

(「烏衣巷」——「金陵五題」の一)

万戸千門成野草 只緣一曲後庭花

(「台城」——「金陵五題」の一)

漢寿城辺野草春 荒祠古墓對荆榛

(「漢寿城春望」)<sup>注④</sup>

これらは、いずれもかつて繁華であった土地がすっかり荒廃したことを「野草」の語によって象徴し、司空曙の「金陵懷古」詩に、「輦路 江楓暗く、宮廷 野草の春」などとも共通する、ごく普通の表現手法である。つまり、「菜花開く」とは、実質的には野草が花咲く意とほぼ同じなわけである。<sup>注⑤</sup>

従って呉其濬が、その著『植物名実図考』巻四、薹菜の条に、

若其積雨初消、和風潜扇、万頃黄金、動連山沢、覺「桃花淨尽菜花開」語為倒置。

と述べるこの記述は、あらためて問題になろう。呉氏は「浄尽」の「浄」を『唐詩紀事』巻三九に「落」の字に作るごとく、桃の花がすっかり散り尽くしたあと、「菜花」が開いたと解釈し、実際の田園風景ではむしろ「菜花」のあとに「桃花」が開くので、季節の推移の描写が「倒置」しているように感じたわけである。いいかえれば、呉氏はこの「菜花」を薹菜<sup>アブラナ</sup>の意にとり、呉氏が生存した一九世紀前半のある一地域におけるアブラナ栽培の開花時期に基づいて、劉禹錫の句にひそむ季節上の矛盾を指摘したわけであるが、これは明らかに誤解といわざるを得ない。ちなみ

に、現代の中国の注釈書の一部には、劉詩の「菜花」をそのまま「菜花」と訳しているものもある。<sup>注6)</sup>これは現代中国語の「菜花」が、一般に①花椰菜（カブチヤウサイ）の通称、②油菜の花の両意<sup>注6)</sup>であることを考えると、読者の誤解を生みやすい訳注であるといえよう。

次に検索しえた唐詩中の「菜花」の用例を見てみたい。

吹苑野風桃葉碧 庄畦春露菜花黄

（齊己「題梁賢巽公房」）

沃田桑葉晚 平野菜花春

（温庭筠「宿豊曲僧舍」）

晩唐の著名な詩僧齊己（八六一—？）の詩には、第一句に「吳王廟の側かたはらに高房有り」とあり、その吳王廟とは、おそらく蘇州の姑蘇山の東北にある呉王夫差の廟を指すだろう。従って春の畦はたけの「菜花」が露にしとどにぬれつつ黄色く咲く田園風景は、長江下流の太湖付近の田園風景を描写したものと考えてよい。また「菜花黄なり」と色彩を明示した点も注目に値する。また同じく晩唐の詩詞の大家温庭筠（八二二—八六六？）の詩も、夏承燾の「温飛卿繫年」の説によれば、江南道余姚（今の浙江省東北）で作られた詩であり、やはり江南の広々とした農村の春景色である（『唐宋词人年譜』所収）。この二例は劉禹錫詩の用例が北方の長安を舞台とするのに対して、ともに江南の農村の田園風景であり、しかも花の色を「黄」とする齊己の用例は、アブラナ科に属する、畦はたけに植えた蔬菜を指す可能性を著しく高める。唐代では蔬菜の品種改良や栽培技術がかなり進歩し、江南地帯でも徐々にアブラナ属の蔬菜が種々栽培されていたと思われる。

北宋時代、黃河流域の華北では、「菜花」といえば、まず蕪菁カブの黄色い花を連想したらしい。『宋史』卷九一、「河渠志一」には、「説く者、黃河の、時に随ひて漲落するを以て、故に物候を挙げて水勢の名と為す」例として、

二月三月、桃華始開、冰泮雨積、川流猥集、波瀾盛長。謂之桃華水。春末、蕪菁華開、謂之菜華水。四月末、蠶麥結秀、擢芒變色、謂之麥黃水。

云々とある。つまり、黃河の水位の定期的変化を、その流域の季節ごとの風物の変遷によって命名したものであり、この場合、春末の菜花がカブのそれであつて、蕪菁アブラナの花でない点は充分注意されてよい。華北地域の晩春の「菜花」といえば、まず畑地に植わるカブの花が連想されたわけである。このことは、カブが華北に広く栽培されていたことを裏付ける。

ちなみに、長江の定期的な増水をも「黃花水」と呼ぶという。北宋末の馬令撰『南唐書』卷五、後主の条（九七四年）には、

每歲、大江春夏暴漲、謂之黃花水。

とあり、南宋の陸游撰『南唐書』卷三、後主本紀の条にも同文がある。文中の「大江」とは長江を指す。春夏の交、長江ぞいに一面に咲きほこる「黃花」とは、やはり黄色い蔬菜の花のようである。『重修政和經史証類備用本草』卷二七、菜部、蕪菁の条に引く北宋の蘇頌らの撰『図經本草』（一〇六一年成立）には

今南北皆通有之。……北土種之尤多。蕪菁四時仍有。春食苗、夏食心、亦謂之臺子。秋食莖、冬食根。河朔尤多種、亦可以備飢歲。菜中之最有益者、惟此耳。

とあり、もっぱら北方で栽培されていたカブも、遅くとも北宋後期には南方でも植えられていたことがわかる。南唐の後主の在位期間（九六一―九七五）はすでに北宋の成立後であり、この「黄花」も蕪菁である可能性が全くないわけではないが、やはり薑薑・蕪菁・菘などのアブラナ属の黄花と広く考えるべきであろう。蕪菁を歌った詩としては、両宋の過渡期に生存した陳与義（一〇九〇―一一三八）の「来禽花」詩に、「舍東 蕪菁 满眼黄なり、胡蝶飛び去り 斜陽を専らにす」とある。この詩は、白敦仁の『陳与義年譜』<sup>注⑥</sup>によれば、北宋末の宣和五年（一一二三）、作者が太学博士として都汴京（開封）に在任中の作と推測されている。

清の呉之振らの『宋詩鈔』と管庭芬らの『宋詩鈔補』によって検索しえた北宋時代の「菜花」の用例としては、政治家として著名な韓維（一〇一七―九九八）の「洛陽雜詩五首」其三に、「上東門外 春三月、桑葉陰陰として菜花を覆ふ」とあるが、むしろ婉約派の大宗と評される秦觀（一〇四九―一一〇〇）の詞「行香子」こそ、平易な措辞で春らんまんたる田園風景の美しさと、そこを散策する喜びをみずみずしく歌いあげた作品として特に注目すべきであろう。

樹繞村莊 水滿坡塘

倚東風 豪興徜徉

小園幾許 収尽春光

有桃花紅 李花白 菜花黃

樹々が村里をとりまき 水がため池のなかにみなぎる

春風に身をまかせ 心も軽やかに行きつもどりつ

小さな小さな園のなかは 暖かい春の日ざしに満ちあふれ

桃の花が紅く すももの花が白く 菜の花が黄色く咲きこぼれる

遠遠田園 隱隱茅堂

颺青旗 流水橋傍

偶然乘興 步過東岡

正鶯兒啼 燕兒舞 蝶兒忙

はるかに連なりゆく垣根 おぼろにかすむ芽ぶぎの家々

酒屋の青いのぼりがはためいている 流れる川のためもと

ふと興にまかせ 東の小山を歩きゆく

折しも鶯が鳴き 燕が舞い 蝶が忙しそ

この黄色い「菜花」も、いちおう「菜の花」と訳してみたものの、具体的な名称は必ずしも明瞭ではない。しかし唐末の齊己の詩や『宋史』河渠志なども含めて、「菜花」の語が春、特に晩春のころの黄色いアブラナ属の蔬菜の花に限定されていくことがうかがわれる。これはまた晩唐の司空図詩の「黄花」とも密接に関連するわけであるが、ひなびた田園の蔬菜の花の美しさが次第に詩人たちの注視をうけはじめた証佐ともなろう。

(9)

「菜花」が黄色いアブラナの意味であることをほぼ確定づける資料が、南宋時代の半ばに現れる。周藤吉之氏の「南宋稲作の地域性」(東京大学出版会『宋代経済史研究』所収)という論文には、

南宋中期の人項安世の『平庵悔稿』巻七「自過漢水、菜花弥望不絶、土人以其子為油」には、

漢南漢北滿平田 三月黄花也可憐

惟有書生知此味 可無詩句到渠邊

油燈夜讀書千卷 蠶白晨供飲十年

<sup>注⑨</sup>

とあって、この頃漢江流域では菜花（油菜）が一面に作られていて、三月にはその花が咲いており、その種子から油が採られていた。この菜花即油菜は薑薑ともいわれていた。この菜花は范成大の『石湖居士詩集』巻二十七、淳熙丙午（十三年、1186）の「四季田園雜興」「晚春雜興」にも、「胡蝶双双入菜花」とあるので、浙西路平江府（蘇州）でも作られていた。又た南宋中期の人裘万頃の『竹斎詩集』巻二「玉山道中、時赴掌故之命」にも、「麦苗堆綠菜花黃、一簇人家古道傍」とあるように、江南東路信州玉山県でも麦が畑で緑のときに菜花が黄くあった。

云々とあり、さらに南宋末期には、水稻の収穫後にアブラナを植える二毛作が行われていたことを指摘する。文中の項安世とは、清の厲鶚の『宋詩紀事』巻五十四の小伝によれば、孝宗の淳熙二年（一一七五）の進士であり、寧宗の開禧年間（一二〇五—七）には湖広転運判官となっている。同伝にはまた「家を江陵に徙す」とあり、湖北省を縦断する漢水とは比較的近くに住んでいた。その詩題によれば、「菜花」とは漢水流域の人が「その子を以て油を為る」、ある特定の蔬菜を指し、それはまた、詩中の「黄花」の語にあたる。これによれば、「菜花」とは晩春に黄花を咲かせアブラナ属の花であることは疑いない。

アブラナの薑薑・蕪菁・菘菜などの実はみな採油に用いられたが、食用だけでなく点燈用にもよく用いられたのは、薑薑であったらしい。「薑薑」を「油菜」とも呼ぶことは、北宋の『図経本草』に初見し、明の『本草綱目』なども採用する。

陶淵明・王維らの流れをくむ田園詩の集大成と評される范成大（一一二六—一九三）の「四時田園雜興詩六十首」には、蔡正孫が「田家の風味を善写す」と評する「胡蝶双双 菜花に入り、日長く客の田家に到る無し」（前引の論文所引）の用例以外にも、「夏日田園雜興十二絶」の初めに、

梅子金黃杏子肥 麦花雪白菜花稀



日長籬落無人過 惟有蜻蜓蛺蝶飛

とある。「胡蝶双双入菜花」の「菜花」については、小川環樹『宋詩選』・入谷仙介『宋詩選』・辛島驍他『宋詩選』・前野直彬編『宋詩鑑賞辞典』（今西凱夫執筆）の諸書がみな「菜の花」と訳し、異説はない。また「麦花 雪のごとく白く 菜花稀なり」の「菜花」については、葛傑・倉陽卿選注『絶句三百首』（上海古籍出版社・一九八〇年刊）に、

菜花指油菜花、鮮黄色、農曆四五月間落花結子、所以說「稀」。

とあり、アブラナの花を指すとする。確かにアブラナ属のなかでも、とりわけ一面に植えられたアブラナの花の満開は最も鮮烈な黄色を呈し、人々に強い印象をきざみつけるものである。<sup>注四</sup>范成大の「四時田園雜興」詩は、その序に「復た石湖の旧隠に至り、野外即事、輒ち一絶を書す」とあり、十二世紀後半の蘇州城の西南「石湖」付近の田園風景を描写したものであり、太湖周辺の長江デルタ地帯の畑地では、アブラナの栽培がかなり盛んに行われていたことを想像させる。このほか、范成大の「初夏」という詩には、

桑葉露枝蚕向老 菜花成莢蝶猶來

とあり、「馬鞍駅飯罷縦歩」詩には、

春事甚寂寥 山桃帶松篁

游蜂入菜花 此豈堪蜜房

とある。「菜花 莢を成す」描写は、『本草綱目』卷二十六、雲臺の条の「結莢取子、亦如芥子」とある記述と符合する。また後の詩の「馬鞍駅」とは、湖南省南部に位置する零陵付近の馬鞍嶺にあるそれと推測され、「遊峰 菜花に入るも 此れ豈に蜜房に堪へんや」の句は、菜花が盛りをすぎたための表現であろうか。永嘉の四霊の一人である徐璣（一一六一—一一二四）の「壬戌二月」詩にも、「濃香 蜜の如く 菜花多し」とあり、アブラナの花が今日のご

とく蜂蜜を採集する春季の代表的な花であったことを思わせる。蜂蜜の利用は戦国から秦・漢時代すでに行われていたが、まだ蜜蜂の飼育はなされず、もっぱら野生蜜にたより、特に廬山（江西省）の天然蜜は有名だったという。<sup>注14</sup>そしてこの野生蜜蜂による蜜の採取（開蜜）が正式に農家の生産事項のなかにくみこまれたのは、唐末五代の『四時纂要』からとされる。また『太平広記』巻二四三に引く『御史台記』によれば、唐の裴明礼は都長安の金光門の外に屋敷を構え、

周院置蜂房、以營蜜。広栽蜀葵、雜花果、蜂採花逸而蜜豊矣。

とあり、唐代すでに養蜂による蜜の採取も行われていたらしい。従って范成大の詩なども、養蜂もしくは野生蜜蜂による蜜の採取を意識した表現としても充分捉えられよう。

このように范成大詩の「菜花」は、ほぼアブラナの花の意に捉えてもよいと思われるが、やや疑問なことは、清の『広群芳譜』（一七〇八年成る）巻一四、薑薑菜の条には、以上の例を全く引用せず、同じ「四時田園雜興」（「春日田園雜興十二絶」の其十二）のなかの「桑下の春蔬 緑 畦に満ち、菘心青く嫩かに芥薑肥ゆ」の句を引いている。これはおそらく薑薑の別名の一つに「薑芥」の語があり（『本草綱目』）、平仄の関係で「芥薑」を転倒したと考えたのであろうか。

また裘万頃<sup>注15</sup>の詩の「麦の苗は緑を堆ね 菜花黄なり」の句は、詩題に「玉山道中」とあるごとく、浙江省との省境に近い、江西省東北部に位置する玉山付近の田園風景の描写であるが、すでに引用した晩春の司空図詩の「黄花入麦稀」「開尽黄花麦未金」の「黄花」が「菜花」であることを傍証しうる用例となりそうである。ただし地域的な差（北方と南方）や時代的な差（約三〇〇年）をひとまず無視したうえで議論ではあるが、范成大詩の「麦花雪白菜花稀」などの句とともに、司空図詩の「黄花」が「菜花」であると説の発生の一因は、こうした南宋中期以降の田

園詩のなかで麦と菜花が一緒に詠みこまれていることに基づくのであろう。

范成大・陸游とともに南宋の三大詩人の一人に数えられる楊万里（一一二七—二〇六）にも、「菜花」を詠んだ有名な絶句がある。「新市の徐公の店はたせに宿す」詩二首のその一に、

兒童急走追黃蝶 飛入菜花無処尋

とある。子どもが黄色い蝶を追いかけたものの、それが一面の菜の花畑のなかに飛び入り、花の黄色にまぎれて見分けがつかず、途方にくれてしまったさまを歌う。晩春の農村地帯で遊ぶ子どもたちの無邪気な愛らしさを見ごとに捉えた詩である。蝶と子どもとりあわせは、すでに北宋の著名な詩人王禹偁（九五四—一〇〇一）の「寒食」に、「稚子花に就いて蛺蝶を拈つまむ」の句が見えるが、楊万里の詩のほうがより動的であり、子どものあどけない姿がよく伝わってくる。また「菜花」と蝶とのとりあわせは、すでに引いた范成大詩の「胡蝶双双入菜花」「菜花成菜蝶猶来」にも見えており、のどかで暖かい晩春の田園風景の一つの典型であろう。

楊万里詩の「菜花」については、後に引くわが国の訳注書はともに「菜の花」とし、北京師範大学出版社刊『歴代四季風景詩三百首』（同書選注組編）にも、ここでは「油菜」の花を指すとする。ただ同書は詩題の「新市」を湖北省京山（武漢の西北）の東南とし、あるいはまた馬漢彦『唐宋絶句選析』（広西人民文学出版社、一九八一年一月）は、「新市」を現在の湖南省攸県の東北とするが、これはおそらく誤りであろう。この詩は楊万里が建康（南京）で江東転運副使に在任していた紹熙三年（一一九二）の作と推定され、『江東集』における詩の配列順序を考えるならば、辛島曉他『宋詩選』や向島成美『中国古典詩聚花—山水と風月—』（小学館）に指摘されるごとく、南京から西南に向かう途上の町と考えざるを得ない。<sup>注60</sup>とすれば、南宋の中期、アブラナの栽培は漢水流域（湖北省）から江南地域に至るまで広範囲で栽培されていたことになる。その栽培区域の広がりと鮮烈な黄色の群がりとは、「菜花」を晩春初夏をいろど

る田園風物詩の重要な一素材となる主因を構成したように思われる。

(10)

南宋の詩壇は十三世紀半ばの理宗朝四〇年以後、おおむね在野の無官、もしくは微官の詩人たちの輩出する、いわゆる江湖派の時代を迎えるが、その代表的な詩人である戴復古（一一六七—？）と高翥の二人にも、「菜花」を詠んだ詩がある。戴の「鄭子寿の野趣を題す」詩には「菜花、園圃、槿花の籬、麦は前坡に満ち 水は池に満つ」とあり、高の「曉に黃山寺を出づ」という詩には、

草色溪流高下碧 菜花楊柳淺深黃

とある。「菜花 楊柳 淺深の黃」の句は、黄色の濃い菜の花と淡い楊柳の糸との色彩上の濃淡を対照的に歌っている。張相儒注『中国山水詩選』（中州書畫社、一九八三年九月）によれば、詩題の「黃山」は安徽省南部の名山であり、これも江南の風景に属することになる。

また元初の至元二十三年（一二八六）、「春日田園雜興」を詩題とした律詩の応募を江湖に広くつづり、その合格者の詩を収める呉渭編『月泉吟社』のなかにも、「菜花」の語が三例見いだせる。第二位になった司馬澄翁（本名は馮澄、以下同じ）の詩には、田植え（挿秧）をひかえた苗代（挿田）の散見する晩春の江南風景を、

黃犢烏犍秧穀候 雄蜂雌蝶菜花天

と歌う。黄犢も烏犍（水牛）も水田の耕作用のそれであろう。水稻の苗が苗代ですくすくと成育するころ、黄牛や水牛を使って田を耕すそば（？）の畑地では、蜂や蝶の群舞するアブラナの花が黄色く咲きつらなる風景である。あるいはこの「菜花」は早稲との二毛作のそれか。「雄蜂 雌蝶 菜花の天」の句は、春らんまんの江南の風景を美しく

描き出す。また第二十八位の方尚老（方士静）の詩には、

秧水平疇蛙閣閣 菜花滿稜蝶飛飛

とあり、蛙がにぎやかに鳴く、水を満々とたたえた苗代の光景とともに、しきりに蝶の舞う畑（の稜）一面のアブラナの花の風景が美しく描かれる。『月泉吟社』巻末の聯句の条にも、俞如山の作として、

鳥隨牛後窺秧穀 蜨趁蜂來恋菜花

とあり、後句はアブラナの花を慕って訪れる蝶と蜂を描く。ちなみに、第五十位の元長卿（陳希声）の詩に、「黄花の菜圃、午風軟かなり」とある野菜ばたけの「黄花」も、「菜花」の別称であろう。俞如山の本籍は未詳であるが、他の三人は義烏、もしくは桐江、つまり今の浙江省の人々であり、江南の春の田園風景として「菜花」はやはり不可欠のものであった。

また南宋の遺民の一人である柴随亨の「江行即事」詩には、晩春の景色を、

菜老花随黄麦落 草長色与緑楊交

と歌い、南宋の人と思われる潘葛民の「胡蝶花」という詩にも、

風光白日長 胡蝶飛過牆

飛飛不停去何忙 牆外誰家菜花黄

出門不知南陌路 心随胡蝶尋郎处

と歌われる。柴の詩は麦の穂が黄色く色づくとともに散りゆく菜花の姿を詠み、また潘の詩は年若い処女の恋心を背景として、蝶と黄色いアブラナの花とが一緒に詠みこまれている。

こうした「菜花」の、田園詩詞における素材としての定着化して興味深いのは、江南地方をいろいろ種々の春の花を咲かせる「二十四番花信風」の成立の時期である。南宋の陳元靚『歲時広記』巻一、花信風の条には『東臯雜録』を引き、<sup>注10</sup>「江南は、初春より初夏に至るまで、五日に一番の風候あり。これを花信風と謂ふ。梅花風は最も先にして、<sup>注11</sup>棟花風、最も後る。凡て二十四番、以て寒絶ゆと為すなり」とあり、さらに、

後唐人詩云、「棟花開後風光好、梅子黃時雨意濃」。徐師川詩云、「一百五日寒食雨、二十四番花信風」。

云々とある。後唐（九二三—九三六）の人の作は二十四番花信風の成立とはほとんど無関係のようであるが、南宋初め（十二世紀前半）の徐師川（名は俯）<sup>注12</sup>の詩句は、遅くとも「二十四番花信風」という言葉が南宋初めには成立していたことを物語っている。明の万曆ごろの人である焦竑の『焦氏筆乘』巻三、花信風の条には、二十四番花信風の具体的な名称をあげている。

〔小寒〕 一候梅花、二候山茶、三候水仙、〔大寒〕 一候瑞香、二候蘭花、三候山礬、〔立春〕 一候迎春、二候桜桃、三候望春、〔雨水〕 一候菜花、二候杏花、三候李花、〔驚蟄〕 一候桃花、二候棠梨、三候薔薇、〔春分〕 一候海棠、二候梨花、三候木蘭、〔清明〕 一候桐花、二候麦花、三候柳花、〔穀雨〕 一候牡丹、二候酴醾、三候棟花、これらの名称は、『広群芳譜』巻一に引く『歲時雜記』と同じであり、ともに雨水の一候には「菜花」の名が見える。明の楊慎『升菴外集』巻八〇、二十四番花信風の条には、これとほぼ同じ文を、<sup>注13</sup>梁の宗懐『荆楚歲時記』のなかに見えろとするが、これはすでに守屋美都雄氏によって指摘されることく、<sup>注14</sup>明らかな誤認である。貴族政治の時代に菜花の麦の花などの素朴な農村の花が人々の注視を集めるはずもないだろう。前引の『焦氏筆乘』巻三の同条には、

唐詩二十四番花信風、一月二氣六候、自小寒至穀雨、四月八氣二十四候、每候五日、以一花之風信成之。

とあり、焦竑は二十四番花信風の成立を「唐詩」にあるとするが、その確証はない。ただ「花信風」という言葉自体は、前引『歳時広記』巻十四に引く『提要録』のなかに、晩唐の詩人陸龜蒙の逸句として「幾点社翁雨 一番花信風」の句が見えるものの、「一番の花信風」の語からただちに晩唐の時すでに「二十四番花信風」の考え方が成立していたかどうかは即断できない。南宋の程大昌『演繁露』巻一には、徐鉉の『歳時記』春日の条より引用として、

三月花開時風、名花信風。初而泛観、則似謂此風來報花之消息耳。按呂氏春秋曰、「春之得風、風不信則其花不成」。乃知花信風者、風応花期、其來有信也。

とあり、宋の高似孫『緯略』巻六の「花信麦信」の条にも、徐鉉の『歳時記』として「三月花開く、花信風と名づく」とある。徐鉉（九二〇―九七四）とは兄の鉉とともに説文学者として知られ、その『歳時記』とは、『宋史』巻二〇五、芸文志四、農家類に「徐鉉歳時広記一百二十卷内八卷闕」と著録するものである。守屋美都雄氏の説くごとく、現在すでに散佚したこの徐鉉の『歳時広記』のなかに、花信風に関するかなり詳しい記事があったとも充分推測することができるが、当時二十四番花信風の個々の名称がすでに成立していたかどうかは明瞭ではない。現存資料によれば、唐宋・五代のころ、「花信風」という言葉が成立し、徐々に二十四番花信風へと結実していったようである。『駢字類編』『佩文韻府』などによれば、「花信」という言葉は北宋中期の司馬光や韓維の詩中に見いだされ、前引の『緯略』『花信麦信』の条には、晏殊（九九一―一〇五五）の詩「春寒尽きんと欲して復た未だ尽きず、二十四番花信風」を始めとして崔德符らの詩を引く。南宋中期（十三世紀初めの寧宗朝）以降になると、前引の南宋初めの徐師川の詩に続いて、二十四番花信風に関する語句が散見するようになる。慶元五年（一一九九）の進士である盧祖皋の

「西江月」には、

## 晚風簾幕悄無人 二十四番花信

とあり、南宋末の蔣捷（一二三五—一三〇〇）の「解佩令」に、

歲歲春光 被二十四風吹老。棟花風 爾且慢到

とあり、王沂孫（一二四〇—一二九〇）の「瑣窓寒」にも、

數東風二十四番 幾番誤了西園宴

などがある。また咸淳四年（一二六八）の進士である莫倫<sup>注</sup>の「摸魚兒」にも、

堪恨処 恨二十四番 花信催花去

と見える。これらの例はいずれも清の朱彝尊編『詞綜』のなかから集めたものであるが、南宋、特にその中期以降、二十四番花信風の語彙が広く流布していたことがわかる。

## (12)

本来、野草・野菜の花を意味する「菜花」という語が次第に晩春に咲く黄色いアブラナ属の蔬菜の花に限定され、やがて藎臺<sup>フツギ</sup>そのものへとさらに意味が限定されていく過程を見てきた。こうした意味上の変遷は、春の蔬菜栽培の地域性やその生産量・品種改良等とも密接に関連するものであろうし、また韻文史的にみても、中唐以降になって次第に増える素朴な「野菜」（食用となる野草・蔬菜）、およびその花の素材化の原因は、安史の乱後の、近世唯一の支配階層となる士大夫の抬頭による、彼らの農村に対するかわり方の変化自体のなかにもあるだろう。それはまた、身辺の雑事に対する詩人たちの注視の表れでもあり、同時に新しい素材の発掘にもつながるであろう。結局、「菜花」は牡丹・李・菊・蓮などのごとく、それ自身で詠物詩詞の対象となりうるほどには愛好されなかったが、それでもやは



り、一面に咲きつらなる黄色い菜の花畑は独特の野趣と春の暖かさにみちた田園詩詞の素材として注目され、南宋の中期以降、有名な詩のなかにも詠みこまれるようになる。これはまた、江南の花だよりをつげる『二十四番花信風』の成立とも微妙に関連しよう。しかしより重要な原因は、南宋の士大夫たちのもつ豊かな農業知識にあるように思われる。南宋の士大夫は北宋以前の詩文実作者層にくらべて、稲作をはじめとする農業技術や農作物の栽培方法に対してより豊かな知識をもち、半壁の天下という制約のもとで一層熱心に勸農を試みている。そして南宋を代表する范成大・楊万里・陸游の三人はともに農村への根強い土着性を持った詩人たちであった。こうした点も田園詩詞の新たな展開を考えるうえで看過できないことであろう。小稿は「菜花」の語の考察を中心として、唐宋の田園詩詞注に関する二、三の問題に言及してみたものである。

(完)

## (注)

- (1) 内田知也「本事詩校勘記」(木耳社刊『隋唐小説研究』所収)。
- (2) 清の趙学敏『本草綱目拾遺』正誤の条には、菟葵について、「花則单黄而大」とある。
- (3) 春陽堂刊『新註校定国訳本草綱目』の六十一頁や三七〇頁前後参照。
- (4) 『劉禹錫集』巻二十四に収める同詩の詩題の下には、「古荆州刺史治亭、其下有子胥廟兼楚王故墳」とある。
- (5) 張碧波・敏尊典『新編唐詩三百首訳釈』(黒竜江人民出版社・一九八四年四月)には、「菜花、野菜花。桃樹桃花全都不見。只有满地野菜花開」とあり、張哲水『千家詩評注』(華東人民師範大学出版社、一九八二年一〇月)にも、「過去の桃樹已經死光了、只有野草野花遍地叢生」と訳する。
- (6) 王啓興・毛治中他『千家詩新注』(湖北人民出版社、一九八一年八月)など。
- (7) 中国科学院文学研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』(商務印書館)など。
- (8) 北京中華書局、一九八三年三月刊。
- (9) この「可」は「却」の意であろう(張相『詩詞曲語辭匯釈』参照)。
- (10) 『唐宋千家聯珠詩格』巻八。

- (11) 小野蘭山『本草綱目啓蒙』卷二十二によれば、薑薑の別名としての「菜花菜」の名を記すのは、明末の汪頤が李東垣に仮託して著した『食物本草』であるという。
- (12) 周密『齊東野語』卷一〇には、范成大の石湖の別荘について、「文穆范公成大晚歲卜築於吳江盤門外十里。蓋因闔閩所築越來溪故城之基、隨地勢高下、而為亭榭。所植多名花、而梅尤多、別築農圃、堂對楞伽山、臨石湖。蓋太湖之一派、范蠡所從入五湖者也」とある。
- (13) 篠田統著『中国食物史』（柴田書店、昭和四十九年六月）の第三章「戦国から秦・漢」の条参照。
- (14) 石声漢『中国農書が語る二一〇〇年—中国古代農書評介—』（渡部武氏訳、思索社）の六十七頁。
- (15) 裘万頃の事蹟については、『宋詩紀事』卷五六参照。
- (16) 『誠齋集』卷八十一に収める「誠齋江東集序」に、「集在金陵及行部広徳・宣・池・徽・歙・饒・信・南康・太平諸郡所作、得詩五百首、乃命曰江東集」とある。なお『宋詩鈔』所収の楊万里の「上龜山寺」に「菜花開処認遺基、荒屋殘僧未忍離」とあるが、この詩は、『宋詩紀事』卷五十九では『誠奎律髓』によるとして南宋の潘檉の作とする。
- (17) 『宋詩紀事』卷六十七参照。
- (18) 『宋詩紀事』卷六〇参照。
- (19) 高似孫『緯略』卷六にも「東皐雜録曰、江南、自初春至初夏有二十四番花信」とある。
- (20) 『宋詩紀事』卷三十三参照。
- (21) 驚蟄の二候の棠梨を棟棠に作る。
- (22) 守屋美都雄著『中国古歳時記の研究—資料復元を中心として—』（帝国書院）の第二篇の『荆楚歳時記』の佚文輯録の条（三七六頁参照）。
- (23) (22)と同じ。
- (24) 崔德符詩亦曰、「清明煙火尚闌珊、花信風来第幾番」、徐師川詩、「一百五日寒食雨、二十四番花信風」、尹遷詩、「曉雨催花信、春衣汚酒痕」。
- (25) 『宋詩紀事』卷五十八。
- (26) 唐圭璋編『全宋詞』の莫侗の条参照。
- (27) 周藤吉之「南宋の農書とその性格」など参照（『宋代經濟史研究』所収）。
- (28) 前野直彬編『中国文学史』（東京大学出版会）の第五章、五代・宋・金の詩（一三九頁—一四一頁）の項参照（山之内正彦執筆）。

② 君実編著『中国山水田園詩詞選』（下冊・詩選田園部分）に見える明・清時代の「菜花」の用例をあげておきたい。明の于謙「暮春」「群芳俱落尽、祇有菜花黄」、清の樂鈞「題白庵蒔菜園」「儂挈竹籃君荷鍤、菜花黄到鬢雲邊」、清の王文治「安寧道中即事」「日暮平原風過处、菜花香雜豆花香」、清の鄭珍「閑眺」「人行蚕豆外、蝶度菜花前」。